

日本人の社会文化的認識と言語使用

本ワークショップの目的は、日本語及び日英語の自然発話データにおける言語使用の分析を通じて、日本人の「社会文化的認識 (sociocultural epistemology)」をあぶり出し、さらに、その社会文化的認識が文化的実践としてのコミュニケーションにおいてどのように達成されているのかを明らかにすることである。

社会文化的認識とは、社会文化的経験を通じて慣習的に獲得される言語使用に関わる知識を指す。そこには、母語話者の世界観、自己観、規範意識などが含まれる。例えば、日本人の言語表現の選択を左右する「わきまえ」(井出 2006) は、話者がコミュニケーションの場における人間関係を解釈し、その中に自己を適切に位置づけるという文化の成員として身につけた社会文化的認識といえる。こうした認識はそれぞれの社会文化の特性を反映した固有的なものであると同時に、言語及び言語使用に埋め込まれ、話者の意識に上りにくいものでもある。

本ワークショップでは、4名の発表者がそれぞれ、繰り返し、笑い、問いかけ、引用という談話現象に関わる言語使用を分析する。そして、日本人の言語使用にどのような役割や自他の認識が反映しているか、英語との対照においてどのような異なりがあるか、文法的特徴と言語使用がどのように関わっているかといった多角度の考察を行い、日本人の社会文化的認識の全体像を可視化する一歩とする。

1. 日本語三者会話における繰り返しの機能と話者の認識・関係性のシフト

本発表では日本語の3者会話に見られる他者発話の繰り返しを取り上げる。3者会話において、そのうちの2者のみの中で発話の繰り返しが起こるとき、そこでは2人の会話参加者が急接近して結束を強める現象(teaming)や、2人で残りの1人をからかいの対象とする現象(teasing)が頻繁に見られる。これらの現象は、3者会話において3人の会話参加者の距離やスタンスが常に一定の状態では進行するのではなく、話題の展開や変化に伴って常にダイナミックに、しかも瞬時にシフトすることを意味する。本研究では3者会話内に見られる繰り返しによる teaming 現象と teasing 現象の分析を通して、他者発話の繰り返しの出現が、会話参加者の相互認識、さらには人間関係の構築に深く関与していることを論じる。

2. 日本人の家族会話における会話スタイル：リスナーシップとしての笑い

本研究の目的は、日本人の家族会話で、各家族メンバーが果たすリスナーシップ(会話の共同構築に向けて果たす貢献)の役割について、特に笑いに焦点をあてて検討することである。本研究では、この検証のために、「会話スタイル」(Tannen 1984)の枠組みを取り入れ、ミクロな会話の特徴からマクロな談話構造と社会構造の両面を反映したリスナーシップと笑いの関係を探る。データは8家族の食事の会話1190分を分析対象とし、会話ス

タイトルを特定する。さらに、親から子供に向けたリスナーシップや、その逆の場合などの分析から、それらと家族メンバーの社会的役割とのつながりについて、社会文化的な認識プロセスの視点を取り入れた考察を行う。

3. 日本人の問いかけ発話に反映する自他の認識—英語との対照を交えて

本発表では、日本人の「疎・上下」、「親・同等」の二者間会話における問いかけ発話を取り上げ、話者が相手に応じてどのように問いかけを用いるか、そこにどのような自他の認識が見られるかを、アメリカ人との対照を交えて分析する。日本人の「疎・上下」会話における問いかけには目上・目下の相補的役割関係への自他の位置づけが見られ、「親・同等」会話には互いの話に互いを誘い込む問いかけの頻繁な使用による自他の融合が見られる。一方、アメリカ人の問いかけ発話には親疎上下の重大な作用は認められない。日本（及びアメリカ）の社会文化に起因する自他の認識が問いかけの使用にあらわれ、またその認識がコミュニケーションを通じて構築されていることを論じる。

4. 会話における心内発話の直接引用—日英語会話の比較

本発表は、日英語母語話者同士2名による会話データにおける引用について述べる。引用には、直接引用から間接引用まで様々な言語形式があるが、ここでは、直接引用に焦点を絞り、会話者の心情・感情に関わること（心内発話）を直接引用で語る場合のやりとりを取り上げる。そこでは笑いが起こったり、聞き手による強い同意表現が後続したりするなど、話者間の会話の進行に積極的な効果をもたらす様子が見られるが、この傾向は日本語会話のほうが英語会話よりも多く見られる。本発表ではこのような違いについて、これまでの日英語比較研究において指摘されてきた日英語の文法的特徴（本多 2009, 池上 2006 他）とそれぞれの母語話者の会話の場に対する会話者としての言語文化的認識の観点から考察する。

5. 総括

以上の発表を総括し、日本語の談話現象及び文法的特徴と社会文化的認識の関わりを論じる。

主要参考文献

Geyer, Naomi. (2010) Teasing and ambivalent face in Japanese multi-party discourse.

Journal of Pragmatics 42 (8). 2120-2130.

本多啓 (2009) 「他者理解における『ウチ』と『ソト』」 平本篤朗, 早瀬尚子, 和田尚明 (編)

『「内」と「外」の言語学』395-422, 開拓社: 東京

井出祥子 (2006) 『わきまへの語用論』大修館書店: 東京

池上嘉彦 (2006) 『英語の感覚 日本語の感覚』NHK ブックス: 東京

Johnstone, Barbara. (1987) Introduction. *Text* 7 (3). 205-214.

Norrick, Neal. R. (1987) Functions of repetition in conversation. *Text* 7 (3). 245-264.

Tannen, Deborah. (1989) *Talking Voices: Repetition, Dialogue, and Imagery in Conversational Discourse*. Cambridge: Cambridge University Press.

Tannen, Deborah. (1984/2005) *Conversational Style*. Oxford: Oxford University Press.